

集団討論を取り入れた学生主体型授業

川 野 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年5月30日受付、2011年7月14日受理)

要 旨

本稿は、授業のなかに集団討論を取り入れ、学生の学びと参加意欲を喚起する授業実践を述べたものである。現在、大学では、教員主導の講義から、学生主導による参加・双方向型の授業が求められている。授業では、毎回、代表学生が授業テーマ内容のプレゼンテーションを行うこと、他の学生には予習レポートを提出することを課した。その後、教員が授業テーマに関する討論題目を提示して、その題目を深めていく方法をとった。また、授業内容を評価するために、「提出用課題解決シート」と「授業評価シート」を作成した。それらによれば、学生は講義形式の授業よりも参加・双方向型の授業を期待していた。

1 問題

平成22年度文部科学省による学校基本調査によれば、高等学校卒業後の大学・短大への進学率が56.8%となり、高学歴志向がますます高まっている。知識基盤社会という言葉の意味が実感され、国民の間ではそのことが実際的なコンセンサスになってきた。その反面、大学卒業生の就職率は60%程度であり、就職できない若者の状況が連日のようにマスコミを賑わしている。今年から大学におけるキャリア教育が義務化され、各大学ではキャリア・デザインなどの科目名によるキャリア教育に関わる指導が学部・学科組織を通じて全学で進められている。

一方では、学生が在学中にしっかりとした専門的知識や技能をはじめとする人間力、社会人としての基礎力などの修得が不十分であるという関係者の声があがっている。そのため、文部科学省や経済通産省では、日本の将来を担う若者を育てるために、多くの施策や事業を大学側に投げかけている。大学は特色ある教育を推進するために、そうした競争的資金獲得のための事業に大学組織を挙げて応募している状況である。そして各大学が組織的に取り組んだ事業報告書には、他大学が見習うべき貴重な教育実践が散見される。

また、平成20年12月の「学士課程教育の構築に向けて（答申）」以来、大学での学士力の質保証がにわかにクローズアップされ、各大学での学生に対する教育指導が重視され始めた。初年次教育の充実、キャリア・デザインの構築など、その取り組みが緒に就いたばかりの感がある。そこには現在の大学や学生が抱えている問題を解決していく糸口が垣間見られたり、学生の学ぶ意欲を育て、自ら考え自ら学ぶ力の育成を目指す取り組みが見られる。こうした

状況のなか、大学ではアドミッションポリシー（AP）、カリキュラムポリシー（CP）、ディプロマポリシー（DP）が声高らかに掲げられてはいるものの、大学が目指す理念や教育目標がどの程度達成されているかを測定する指標や評価基準はまだ確立されていない。各大学では就職率や各種国家試験合格率などの結果が、その指標の一つとして活用されている程度である。今後、各大学がディプロマポリシーの出口戦略として、学生が在学中に培ってきた総合的な資質能力を客観的に判断できる基準を開発することが求められる。

そうした大学改革の流れのなかで、学士力の質保証のために、担当科目のなかで標題のような取り組みをデザインした授業実践を始めた。本論文ではその概要を述べるとともに、学生主体型授業の在り方を追究していきたい⁽¹⁾。

2 研究対象・方法

対象は、平成22年度養護教育科専攻科1，2年生である。授業科目は「教育方法学特論」と「教育基礎特論」である。授業では学生主体型授業を進めるために、集団討論を取り入れた授業を行い、毎回、授業アンケートをとって授業内容を振り返った。授業に対する質問・要望などに対しては、次時の授業で回答して学生にフィードバックした。また、アンケートは集計を行い、授業での各個人の変化と学級集団の変化を統計的に振り返ることにした。

3 研究内容

（1）集団討論を取り入れた経緯

先ず、授業で集団討論を取り入れることを考えた理由について述べる。22年度前期授業においても、学生主体型授業を目指した。そこでは発表課題をあたえ、それを代表学生がパワーポイントを使ってプレゼンテーションをするものであった。発表後は、質問を受けるとともに、教員が補足資料を準備してそれを説明する授業形態であった。後期授業も前期授業の延長線上での取り組みを予定していた。しかし23年度教員採用試験に向けて、養護教育科の教員全員が教員採用試験に関わりを持ったことが大きな契機となった。具体的には、学科で7月中旬に実施される教員採用試験では、筆記試験の他に、多くの都道府県が集団面接や集団討論を課していた。そこで、都道府県ごとの一次採用試験における集団面接と集団討論とを事前学習として計画した。さらに、第二次試験では、個人面接、集団討論、模擬授業、実技などがあるので、一次合格の学生には、二次試験対策のための準備を計画した⁽²⁾。

（2）授業の実際

第1回授業オリエンテーションでは、学生主体型授業の目的として、「自ら課題を設定し、自ら学び、自ら考え、自ら判断して、主体的に課題を解決していく実践的な資質能力を育成

する」「能動性、主体性、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、課題発見力、問題解決力など、社会人としての実践力を修得するとともに、論文執筆の基礎力を付ける」などを設定した。この他、授業の進め方、課題発表のやり方、集団討論の方法、コーディネータの役割、授業の時間配分などを明記した表1の「学生主体型授業の進め方」の資料を作成した。

この資料は第1回授業オリエンテーションで使用したものであり、学生主体型授業の具体的内容を説明したものである。どのようにして実際の授業を進めていくのか、事前学習としてどのような予習が課せられるか、課題発表にはどのような準備が必要か、さらに集団討論における各自の役割とその結果として何が修得されるか、など期待される内容をまとめたものである。

表1 学生主体型授業の進め方

学生主体型授業について	
1	目的
<ul style="list-style-type: none">・自ら課題を設定し、自ら学び、自ら考え、自ら判断して、主体的に課題を解決していく実践的な資質能力を育成する。・学生の能動性を引き出す。・学生同士で、教え合い、学び合う。・能動性、主体性、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、課題発見力、問題解決力など、社会人としての実践力を修得するとともに、論文執筆の基礎力を付ける。・有意な人材として活躍できる力量を形成する。	
2	方法
<ul style="list-style-type: none">・課題について、パワーポイントを使用したプレゼンテーションを行う。・課題に関する集団討論を行う。	
3	課題発表について
<ul style="list-style-type: none">・プレゼンテーションは、事前に発表原稿を作成し、それを参考にして発表する。・発表を聞く側は、発表後に質問をするため、メモをとりながら発表を聞く。・発表者は質問された内容については、安易に「分かりません」とは回答しない。何とか考えて質問者に回答する。どうしても答えられない場合は、次週までに調べた内容をまとめたレジュメを配布し、回答を3分以内で説明する。	
4	集団討論について
集団討論では、次のことが期待できる。	
<ul style="list-style-type: none">・ディスカッションが活性化する。	

- ・ディスカッションを通して、学生相互の学び合いができる。
- ・他の学生の話聞きながら、自分と違う見方、考え方、視点を知り、自分の発想が豊かになる。
- ・他の学生のアイデアから学べる。
- ・他の学生の話聞くことは、大切なコミュニケーションの一つだが、そのことを糸口にして、自分の意見を言えるようにする。
- ・グループ内で自分の貢献度、存在感をアピールする。

5 コーディネータの役割

- ・コーディネータは、責任あるタイム・マネジメント（時間管理）を行い、決められた時間を効率的、効果的に使う。
- ・提出物のとりまとめ（予習レポート、提出用課題シート、授業評価）と欠席者への資料配布（発表資料）

【時間配分】

- | | |
|------------------------------|-----|
| ・出席確認と本時の授業テーマの説明 | 10分 |
| ・パワーポイントによる発表と質問 | 20分 |
| ・集団討論題目についての各自の考えのまとめ | 5分 |
| ・集団討論題目についての各自の考えの発表（一人1分程度） | 15分 |
| ・各自が発表した集団討論題目を深める | 30分 |
| ・授業アンケート／提出用課題シートの記入 | 10分 |

6 その他

- ・病気や事故などで授業に出席できない場合は、当日の発表者とコーディネータの代理を他の学生に依頼する。
- ・当日、出席できないと言われても、皆が当惑するので、体の調子がよくない場合は、早めに交代しておく。

また、授業中に学生が主体的に意欲をもって学習すること、授業中の質問や要望に応えるため、学生自身の授業記録を残しておくためなどの理由から、表2の「提出用課題解決シート」を作成して授業後に提出させた。このシートを見れば、授業中の各学生一人ひとりのおおよその参加態度と授業中の様子が把握できた。

表2 提出用課題解決シート

◆教育方法学特論		提出用課題解決シート		10月22日	氏名()
本日の私の 学 習 目 標					
課題発表者		コーディネータ			
課題発表に 対する質問					
集団討論の 題 目	発達障害の具体的事例をあげ、その障害を持った児童生徒に対して、養護教諭として、どのように関わりと好ましい人間関係を構築するか。				
私の考え・意見					
相手の考えや意見で良いと思った内容／自分と違った視点や観点で良かった内容					
本日の私の学習目標に対する自己評価（記述する）					
本日の授業の質問・要望・感想（記述する）					

さらに学生主体型授業が実践できているかどうかを客観的に判断するため、表3の「授業評価シート」を作成し、毎回の授業に関するデータを集めて統計処理を行った。授業はまず、テーマに関する教科書内容を担当学生が予習した要約を発表することから始めた。発表学生以外は、本時の授業テーマ内容をレポートとして提出することを課した。発表学生がプレゼンテーションをした後、教員が発表内容に関わる討論題目を与え、それを議題にして討論授業を行った。なお、実際の授業の流れを箇条書きにすると、次の①～⑤に要約される。

- 表3 授業評価シート

あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
---------	------------	---------	-------

- | |
|--|
| |
|--|

- | |
|--|
| |
|--|

専攻科1、2年生の授業で、その日の授業テーマに関して作成した集団討論の題目は、下の表4、表5である。

表4 専攻科1年生の討論題目

授業日		授業テーマ	集 団 討 論 題 目
1	9/24	オリエンテーション	集団討論について説明。
2	10/1	教育における発達	意欲をかりたてる保健指導に必要な工夫点は何か。
3	10/8	能力、人格、個性の とらえ方	手洗い後、洋服で手をふく小学3年生の児童をどうやって指導するか。
4	10/15	学校教育の任務と課題	総合的な学習の時間では、体験活動が重視される一方、この時間の問題も出ています。この時間の問題点をあげ、望ましいこの時間の在り方について、あなたの専門性を活かした取り組みを述べなさい。
5	10/20	教育課程を編成する	学校におけるいじめに対する教師の基本姿勢は何か。また具体的ないじめの事例をあげ、養護教諭として組織的にどのように取り組むか述べなさい。
6	10/29	学校教育の今日的課題	多くの小中学校では、国際理解教育に取り組んでいます。国際理解教育とは、どのような教育をすることか具体的事例をあげて述べなさい。
7	11/12	特別支援教育の展開	発達障害の具体的事例をあげ、その障害を持った児童生徒に対して、養護教諭として、どのような関わりと好ましい人間関係を構築するか。
8	11/19	教育活動における 評価の役割	児童生徒の学ぶ意欲を育てる評価はどのようにしたらよいか。また指導と評価の一体化とは、具体的にどうすることかを述べなさい。
9	11/26	家庭教育の現状と課題	虐待とはどういう内容をいうのか。校内で虐待されている児童生徒がいることを耳にした場合、養護教諭としてどのように対応するか。
10	12/1	生涯にわたる学習の展開	生涯学習社会の中で、養護教諭として自己成長していくには、どのような内容を学び続けたらよいか述べなさい。
11	12/10	ボランティア活動と 社会活動	ボランティア活動の教育的意義を述べよ。またボランティア活動を児童生徒にどのように進めたらよいか、その具体的方法を述べなさい。
12	12/17	教師の仕事と教師の研修	「学校は教師次第である」との言葉があります。教員養成課程の望ましい養成や在り方について、具体的な事例を通して述べなさい。
13	1/14	教職の性格と優れた 教師の条件	すぐれた教師とは、どういう資質能力を備えた教師と考えますか。これまで出会った教師にそういう人がいれば、具体例に述べなさい。
14	1/21	戦後教育改革と教師の 役割	現在の小中学校では学力格差が問題になっています。これを解決するには、教師は組織的にどのように取り組むべきか述べなさい。
15	1/26	評価テスト(記述式)	集団討論題目から出題

表5 専攻科2年生の討論題目

授業日		授業テーマ	集 団 討 論 題 目
1	9/24	オリエンテーション	集団討論について説明。
2	10/1	教育実践において子どもを理解するとは	指導では、児童生徒を理解することが重要であると言われている。児童生徒理解とは何か。
3	10/8	子どもたちの日常世界	手洗い後、洋服で手をふく小学3年生の児童をどうやって指導するか。
4	10/15	子どもを直撃している格差・貧困	現在、尖閣諸島について中国との関係が問題になっています。これについてどう考えるか。
5	10/22	発達障害をもつ子どもをどう理解するか	発達障害の具体的事例をあげ、その障害を持った児童生徒に対して、養護教諭として、どのように関わりと好ましい人間関係を構築するか。
6	10/29	子ども理解と教育実践	学校では子ども理解は大切であると言われる。学校全体で子ども理解に取り組むためには、どのようにしたらよいか。あなたの職務を踏まえて述べなさい。
7	11/12	「全校一斉学力テスト」をどう考えるか	全国一斉学力テストが行われています。現在、学校（学習指導要領）で、要請され（求められ）ている学力は、どのようなものですか。
8	11/19	現場の同僚とどうつきあうか	教職員のチームプレーを活発にするため、養護教諭としてどのような関わりが持てるか。
9	11/26	教員研修はどうあるべきか	現在、養護教諭に求められている資質能力は何か。また養護教諭を対象にした行政研修は、どういう内容が適切と考えるか。
10	12/3	教員評価と免許更新制を考える	教員評価はなぜ行われるのか。また不適格教員とはどのような教員をいうのか具体的な姿をあげて説明しなさい。
11	12/7	学校統合はなぜ進むのか	養護教諭の仕事の困難はどこにあると思うか。またその困難を乗り越えるための具体的方法について述べなさい。
12	12/17	地域の再生と学校	学校改革の中で、保護者による学校選択制が取り入れられている地域があります。学校選択制の功罪について論じなさい。
13	1/14	教育改革と教育実践の課題	社会ではよく「自己責任」という言葉が使われます。児童生徒に対してこの自己責任という言葉は通用するものだろうか。
14	1/21	いま何をどう改革すべきか	ニートという言葉をよく耳にするが、学校でのキャリア教育はどのように進めたらよいか述べなさい。
15	1/26	評価テスト(記述式)	集団討論題目から出題

4 授業の検証

(1) 授業アンケートの集計

授業アンケートは、選択問題を9問、自由記述を2問の計11項目で作成した。表3で掲げているように、問1～問9に対して「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4つの選択肢を付けた。そして順に4点～1点を与え点数化して集計した。

なお、授業毎に学生数(A～L)のデータが得られた。例えば、専攻科1年の2回目授業では、出席学生数が9人で、問1～問9の点数化したサンプル数が9であるから(問10と問11の自由記述は省く)、点数化したデータは、81(9×9)個となる。次に学生が回答した各問に対する相加平均と標準偏差を求めた。また個別学生が問1～問9まで回答した相加平均と標準偏差も出した。下の6表は、個別学生が回答した問1～問9の得点を求めたものであり、学生の各問に対する回答の相加平均と標準偏差および各学生の問1～問9の相加平均をまとめたものである。縦軸と横軸の相加平均値は、学生が意欲を持って主体的に授業に取り組んでいる指標と考えられる。またその相加平均値を学生の意欲と主体性を示す1つの指標と考えて、各授業毎(2回～14回)の授業評価全体の相加平均と標準偏差をまとめた一覧が表7である。

表6 2回目授業アンケート集計

2回目	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	相加平均
A	2	2	3	3	2	3	3	3	3	2.667
B	4		3	3	3	3	4	4	4	3.5
C	3		4	3	3	3	3	3	4	3.25
D	4	2	3	3	3	4	4	3	4	3.333
E	3	3	3	2	2	3	3		4	2.875
F	欠席									
G	3		2	4	3		4	4	4	3.429
H	4	1	2	2	2	3	3		4	2.625
I	4	3	3	2	2	3	3	3	1	2.667
J	4	1	4	3	3	3	3	3	3	3
K	3		3	2	2	3	3	3	3	2.75
L	3	2	3	3	3	3	3	3	4	3
サンプル数	11	7	11	11	11	10	11	9	11	全体
相加平均	3.364	2	3	2.727	2.545	3.1	3.273	3.222	3.455	3.009
標準偏差	0.6428	0.7559	0.6030	0.6166	0.4979	0.3000	0.4454	0.4157	0.8907	0.3086

表7を見れば、各授業に対する学生の意欲と主体性の全体傾向が把握できる。例えば表7の2回目授業では、81の得点(9×9)があるが、その平均値が3.0であり、標準偏差が0.31であることを示している。「あてはまる」が4点で「ややあてはまる」が3点であるから、「あてはまる」と「ややあてはまる」の回答を込みにしたものを、授業に主体的に取り組む学生の姿と考えれば、2回目授業の平均値3点は、学生が授業に肯定的評価をしていると考えられる。

表7 2回～14回の授業アンケートの相加平均と標準偏差

指標 授業	専攻科1年生			専攻科2年生		
	相加平均	標準偏差	サンプル数 (出席数)	相加平均	標準偏差	サンプル数 (出席数)
1回	オリエンテーション		12	オリエンテーション		20
2回	3.0	0.31	11	アンケート未実施		17
3回	3.1	0.35	9	2.7	0.72	12
4回	2.9	0.38	11	2.8	0.66	9
5回	3.1	0.42	6	2.7	0.57	8
6回	3.0	0.38	12	2.7	0.50	11
7回	3.0	0.36	11	2.8	0.50	15
8回	3.2	0.49	9	3.0	0.52	16
9回	3.1	0.31	8	2.9	0.46	19
10回	2.9	0.16	7	2.9	0.63	15
11回	3.1	0.34	10	3.0	0.59	16
12回	3.0	0.37	9	3.0	0.51	12
13回	3.0	0.44	12	2.9	0.51	15
14回	3.0	0.11	7	3.1	0.39	15
平均	3.0	0.34		2.9	0.55	
15回	評価テスト		Σ122	評価テスト		Σ180

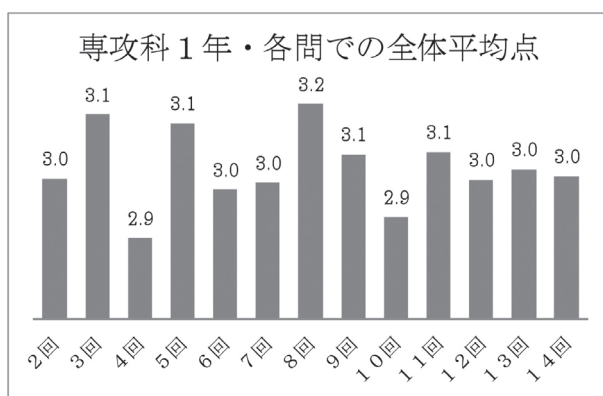


図1 授業の全体評価

図1は、専攻科1年の授業科目「教育基礎特論」の2回～14回において実施した授業評価シートをグラフにまとめたものである。14回の授業全体をどのように総括的に評価するかについては、方法論的には難しいことであった。各授業に対する学生からの評価を客観的にどういう指標を用いて表現するかについて迷ったが、点数化した回答の平均値で考えることにした。

まず、各問に対する学生12名の相加平均を求めた。次に問1～問9までの相加平均の平

均値を求め、それを当該授業の全体評価の指標とした。このようにして計算した2回～14回までの平均値を縦軸に、各授業回数を横軸にプロットしたグラフが図1である。

図1によれば、各授業の点数は3.2～2.9とグラフ上での変化はあるものの、数値的には平均3.0、標準偏差0.34の評価である。また「予習や復習をしたか」「集団討論で発言して積極的に参加したか」「自分で考える習慣がついたか」など、学生が自ら学ぶ姿を問う内容では、「ややあてはまる」と肯定的な回答をしていると言える。

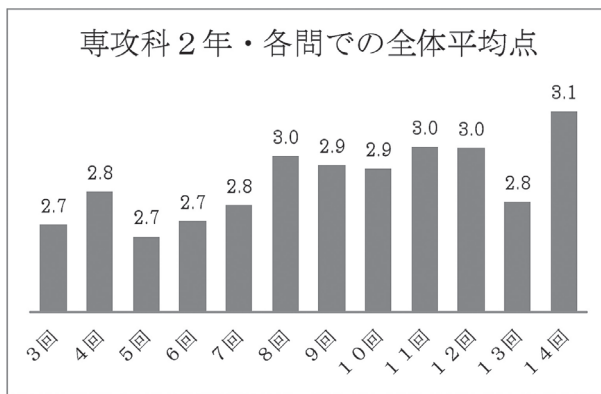


図2 授業の全体評価

比べれば、2年生の方が平均値で0.1ポイント低く、標準偏差で0.21ポイント広がっているが、自ら学ぶ姿勢と学生参加型授業の育成では肯定的に解してよいだろう。つまり、2年生も自らの授業の取り組みを「ややあてはまる」と前向きに評価していると考えられる。

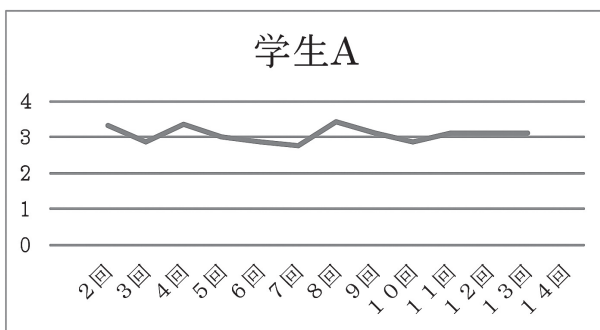


図3 個別学生の得点推移

同様に図2は、専攻科2年生の授業科目「教育方法学特論」における3回～14回の授業評価の平均値を示したものである。これによれば、各授業の点数は3.1～2.7とグラフ上での変化はあるものの、それらをならしてみれば、数値的には平均は2.9である。また表7から標準偏差の平均は0.55である。専攻科1年生との平均値と標準偏差を

次に授業における学生一人ひとりの評価を考えてみよう。授業ごとの学生個人の得点変化は、例えば次のように視覚化できる。図3は、表6の授業アンケート集計から特定の学生Aのデータを視覚化して示したものである。学生Aは、2回～14回までの全体的授業の平均は3.1である。この学生は、筆者が意図する

学生主体型授業を体得していると考えerことは可能であろう。

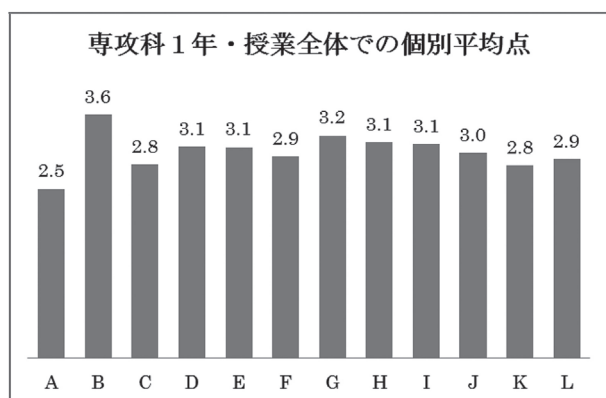


図4 個別学生の授業全体平均（1年生）

均3.0の「ややあてはまる」という評価を与えており、学生主体型授業になっていると言える。

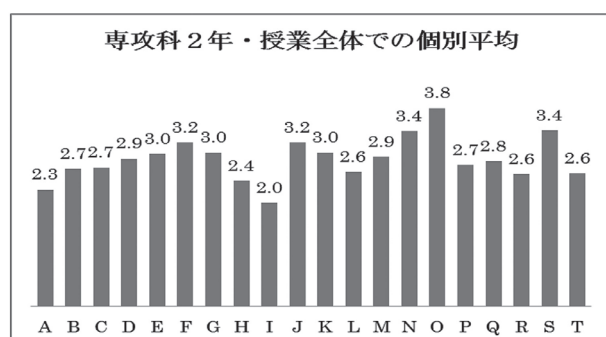


図5 個別学生の授業全体平均（2年生）

このようにして、専攻科1年の個別学生が回答した2回～14回までの授業全体の平均点を示したグラフが左の図4である。つまり、図4は、専攻科1年生の第2回～第14回までの授業アンケートの個別平均点である。授業全体での個別平均は3.6～2.5までの広がりが見られる。これから各学生は、第2回～第14回の13回分の授業に平

均2.9の評価を与えており、2年生も1年生と同様に学生主体型授業になっていると評価している。

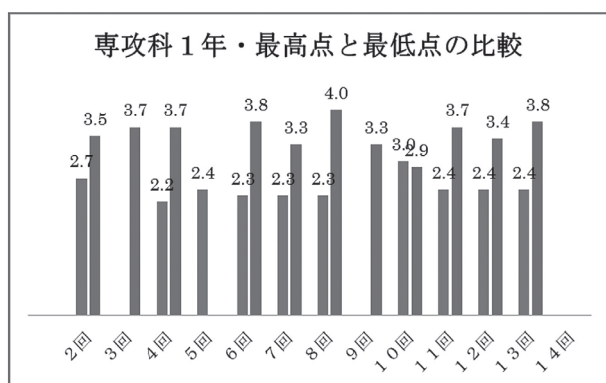


図6 専攻科1年生の授業の最高点と最低点の比較

図6は、第2回～第14回までの専攻科1年生の授業の最高点と最低点を比較したグラフである。最高点の学生は、自らが学ぶ意欲を持って主体的に取り組んでいると思っているが、最低点の学生は、それについては消極的な考えを持っていることが予測される。その要因の特定は困難だが、授業後のアンケート

で低い得点を与えていたのであろう。例えば、他の項目は高い評価を与えていたが、予習

レポートの提出が出来ていなかったり、発言がなかったり、存在感を感じなかった場合には、その項目を低く評定していた。

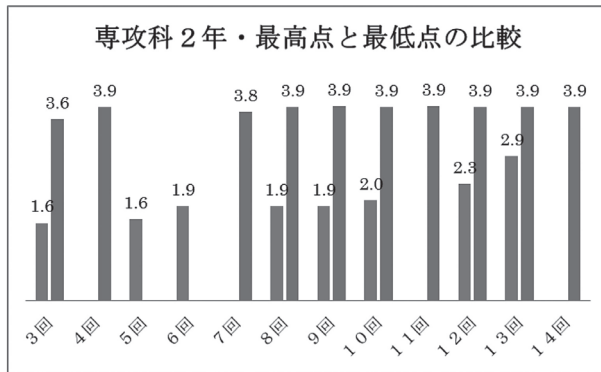


図7 専攻科1年生の授業の最高点と最低点の比較

図7は、第3回～第14回までの専攻科2年生の授業の最高点と最低点を比較したグラフである。専攻2年生では、最高点は「あてはまる」の4点にほぼ匹敵しているが、最低点は、「あまりあてはまらない」の2点に近い。最低点を与えている学生は授業での参画が不十分であったことが予想される。

表8 専攻科1年の各問の相加平均と偏差値の一覧

授業	指標	予習実行	復習実行	討論時間	積極的発言	存在感	思考習慣	参画実感	楽しい授業	レポート提出	全体
2回	X	3.4	2.0	3.0	2.7	2.5	3.1	3.3	3.2	3.5	3.0
	SD	0.64	0.76	0.60	0.62	0.50	0.30	0.45	0.42	0.89	0.31
3回	X	3.1	2.3	3.3	3.2	3.0	3.3	3.3	3.2	3.4	3.1
	SD	0.99	0.94	0.47	0.63	0.67	0.47	0.47	0.63	0.96	0.35
4回	X	3.0	2.3	3.5	2.7	2.6	2.8	3.0	2.9	3.1	2.9
	SD	0.74	1.05	0.50	0.46	0.64	0.57	0.60	0.51	1.17	0.38
5回	X	3.3	2.2	3.7	2.8	2.7	3.5	3.3	3.3	3.3	3.1
	SD	0.75	0.90	0.47	0.69	0.47	0.50	0.47	0.47	0.75	0.42
6回	X	3.5	2.4	2.7	2.7	2.7	3.1	3.2	2.9	3.6	3.0
	SD	0.65	0.95	0.78	0.64	0.46	0.64	0.55	0.64	0.64	0.38
7回	X	2.9	2.2	3.2	3.0	2.5	3.1	3.4	3.0	3.4	3.0
	SD	0.90	0.98	0.60	0.63	0.67	0.30	0.48	0.43	0.80	0.36
8回	X	3.4	2.6	3.6	3.0	2.6	3.3	3.3	3.2	3.4	3.2
	SD	0.68	0.99	0.50	0.47	0.68	0.67	0.47	0.63	0.68	0.49
9回	X	3.0	2.4	3.3	2.9	2.8	3.3	3.3	3.4	3.5	3.1
	SD	1.07	0.90	0.45	0.60	0.43	0.43	0.43	0.70	0.76	0.31
10回	X	3.3	2.4	2.5	2.5	2.3	3.2	3.0	3.0	3.7	2.9
	SD	0.45	0.73	0.50	0.50	0.43	0.37	0.00	0.58	0.47	0.16
11回	X	3.4	2.3	3.3	2.9	2.7	3.2	3.1	3.1	3.6	3.1
	SD	0.68	0.82	0.47	0.54	0.46	0.40	0.30	0.54	0.50	0.34
12回	X	2.9	2.7	3.4	2.9	2.9	3.0	3.1	3.4	2.7	3.0
	SD	0.99	0.70	0.48	0.60	0.57	0.00	0.33	0.48	0.94	0.37
13回	X	2.8	2.5	3.3	2.9	2.8	3.2	3.3	3.3	3.4	3.0
	SD	0.83	0.87	0.62	0.76	0.72	0.37	0.43	0.43	0.49	0.44
14回	X	3.1	2.7	3.4	2.9	2.7	3.0	3.0	3.1	3.2	3.0
	SD	0.64	0.70	0.49	0.35	0.45	0.00	0.00	0.35	0.37	0.11

専攻科1年生の授業で、第2回～第14回授業での各問に対する相加平均と標準偏差をまとめた一覧が表8である。なお、授業アンケートの質問項目は次の省略形の文言で表現した。問1「予習実行」、問2「復習実行」、問3「討論時間」、問4「積極的発言」、問5「存在感」、問6「思考習慣」、問7「参画実感」、問8「楽しい授業」、問9「レポート提出」とした。表8により、各授業毎、あるいは各問毎における平均値と標準偏差の様子が理解される。表

8の値は、授業全体に対する学生の学びの意欲と主体性を示す指標をまとめたものと考えられる。13回の授業全体を見れば、4回と10回は指標が2.9だが、それ以外の授業では3点台をクリアしているので、学生主体型授業が実現されていると解釈してよいであろう。

5 考察

平成20年12月の「学士課程教育の構築に向けて（答申）」以来、大学改革の流れの一つとして、学士力の質保証という問題がある。学士力の質保証に関わる授業改善での取り組みは、1980年代終わり頃から提唱され出したFDにその起源がある。FDが義務化された現在では、どの大学でも、FDに関する組織的な取り組みが推進されている。しかし各大学におけるFDの取り組みは様々であり、単に学期末の授業評価に特化して狭い領域でとらえている事例も見られる⁽³⁾。

一方、最近の事例では、九州大学を中心にしたQ-Links（九州地区大学教育改善FD・SDネットワーク）の事例に見られるように、各大学が連携してFDを推進していく機運が盛り上がっている。また山形大学をはじめFDとSDとの連携で大学改革に取り組んでいる事例も見られるようになった⁽⁴⁾。そうした文脈のなかで、各大学では、AP・CP・DPの3つのポリシーが掲げられるようになってきた。だがそれらポリシーに書かれている文言の中味を吟味してみると、幾多の疑問点が湧いてくる。例えば本学子ども健康学科のCPでは、「幅広い教養の習得をめざす科目群のほか協調性・自己理解力・判断力の獲得のためのキャリア支援科目を加えた教養教育科目を配置するとともに、子どもの発達支援及び健康の維持増進に関する専門的知識・技能を獲得するための専門教育科目を配置する。専門教育科目は、全学共通の基礎科目と、進路に応じて「発達支援領域」、「健康支援領域」のいずれかに軸足を置きながら両領域の知識・技能を修得するように基幹科目及び教職関連科目を配置する」となっている⁽⁵⁾。またDPでは「他者との協調性、自己理解力、的確な判断力を身に付け、自主自律の人材であるとともに、子どもの心身の健やかな成長・発達について基本的な知識及び技能を有し、子どもの成長・発達と健康の維持増進を支援することのできる実践的力量を身に付ける」と記載されている⁽⁶⁾。こうしたポリシーを日々の教育のなかでどのように修得させ、そして卒業時にそれらを修得した実際の学生の姿として可視化することは並大抵ではない。

学士力の質保証の問題は複雑で広範囲におよぶものであるだけに、筆者は担当科目の授業改善を通して質保証を図ることにした。特に学生主体型授業を構築する視点から、自らの授業改善を試みてきた。筆者が目指す授業は、学生の学ぶ意欲を喚起する参加・双方向型授業であり、学生の生きる力を育成するものである。生きる力の要点は、①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること、②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態

度を育て、自己の生き方を考えることができるようになることである⁽⁷⁾。これらの生きる力が授業の中でどのように修得できたかは、難しい面があるものの、授業中における学生の意欲・関心・態度、授業アンケート、提出用課題解決シートなどを見る限りでは、ある程度は達成されているように思えた。そのことを学生の自由記述内容から抜粋して学生自身の言葉で伝えてみたい。

- 集団討論形式で行う授業の形について、自分も含め全員にとってとても役立つ授業形式だったと思う。短大生の時も全くといっていいほど集団討論や面接に関する授業や配慮がなかった。講義ばかりの授業ではなかなか頭に入らないので、体験として授業に取り組んでいくと学ぶ意欲を身に付けられるのではないだろうか。
- 集団討論は、とても良い勉強になりました。その理由は、他の人の意見を多く聞くことができたことです。自分と同じ意見でも少し視点が違ったり、反対の意見もあったりと、自分の考えでは足りない部分や新しい考えを他の人から発表で聞くことができました。
- このような授業方式は大学生活4年間のなかで初めてでした。教科書をたんと進めるのではなく、教科書を利用し事前に予習を行い、疑問点等を見付け、教科書の内容をパワーポイントでより深く理解することができました。教師は発言力だけが求められるわけではありません。他人の意見をしっかり聴く力、協調性やよりよい結果を導くための方法、まとめる力等、様々な力が必要とされます。このように重要なことなのに、大学の授業の中で集団討論に関する機会が無いのはおかしいなと思っていました。この授業を後輩にも同じように行って欲しいと思っています。
- 集団討論では新たな発見がたくさんあった。クラス全体で行うと、一人の発言回数は少なくなるので、毎時間グループを変えて討論し、最後にグループの代表者が出た意見をまとめて発表することで、積極性や自分で深く考える力、まとめる力が身に付くと思う。また先生やプレゼンテーション担当者が、次の討論の議題に沿った新聞記事の切り抜き等を準備することで、国や地方の政策等がわかり、より深く考えることができるのではないかなと思う。毎週討論の時間がある授業はこの授業しかなく、他の授業と違って一方的でなかったことが、学生も参加している感じがして良かったと思う。自分にとっては役立つ授業だったので、改善しながら続けて欲しいと思う。
- 討論形式の授業は初めてだったので、はじめはとても嫌でした。自分が言いたいことがあるのですが、うまくまとめることができず、他の人の意見を聞いて、すごいな、さすがだなと思いました。回数を重ねるとだんだん討論することに慣れてきました。発表する時の言葉の言い回しやまとめ方など、どう言ったら相手に分かりやすく伝えられるか分かるようになってきました。討論することで、他の人の意見を聞くことが

できるので、とても勉強になりました。この授業は自分たちの意見や考えを深められる授業だったので楽しかったです。このような機会はほとんどないので、とても勉強になりました。

以上、学生の授業に対する感想の一部を紹介したが、多くの学生がここに記しているような思いを抱いていた。今後も学生の学ぶ意欲を育てる学生主体型授業に取り組んでいきたい。

注

- (1) 小田隆治・杉原真晃編著『学生主体型授業の冒険』ナカニシヤ出版 2010年8月
- (2) 拙著「学士力の質保証に関する研究(2)－学生主体型授業に関する考察－」九州女子大学紀要 47巻2号 2011年1月
- (3) 拙著「大学における改革の潮流と教育の再考－本学FDの推進に向けて－」九州女子大学紀要 46巻2号 2009年
- (4) 小田隆治『大学職員の力を引き出すスタッフ・ディベロップメント』ナカニシヤ出版 2010年12月
- (5) 九州女子大学・九州女子短期大学ホームページ「情報公開・カリキュラムポリシー」
<http://www.kwuc.ac.jp> 2011年7月8日取得
- (6) 九州女子大学・九州女子短期大学ホームページ「情報公開・ディプロマポリシー」
<http://www.kwuc.ac.jp> 2011年7月取8日取得
- (7) 拙著『実践！学校教育入門－小中学校の教育を考える』昭和堂 2011年4月 127頁

The Introduction of Group discussion as one of the learner-centered teachings

Tsukasa KAWANO

Department of Education and psychology, Faculty of

Humanities ,Kyushu Women,s University

1-1Jiyugaoka Yahatanishi-ku, Kitakyushu-Shi Fukuoka 807-8586 Japan

Abstract

We introduce a group discussion in class, the style of practice to stimulate interest and participation in student learning. Currently, in my university, every time students make a presentation on teaching students what themes representative imposed by other students to submit a report preparation. After the presentation on the subject topic to present the classroom teacher, took the way to deepen their titles. In order to evaluate the course content, create a sheet assignment and a sheet class evaluations. According to them, students were expected to class participation more class lectures.

Keywords : Group discussion、Learner-centered teaching、Interactive teaching